古文「主語把握」100題ドリル｜無料PDFと解答付き　解答・解説編

【第1部】助詞の手がかり（Q1〜Q20）

Q1. ▶ 答え：**ア**　「て」は主語が続きやすい合図。山に入ったのも竹を取ったのも翁。

Q2. ▶ 答え：**イ**　「ば」で主語が交替しやすい。前半の動作主は姫、「ば」のあとは翁に変わる（ここでは「翁」と明示もされている）。

Q3. ▶ 答え：**ア**　「て」で主語が続く。書いたのも持たせた（持たせて遣った）のも中将。実際に持つのは随身だが、「持たせ」る動作の主語は中将。

Q4. ▶ 答え：**ウ**　「に」で主語が交替しやすい。上げたのは女房、「に」のあとは姫に変わる。

Q5. ▶ 答え：**イ**　「ど（〜けれど）」で主語が交替しやすい。遣るのは中将、返り事をしないのは姫。

Q6. ▶ 答え：**ア**　「で（〜ないで）」も「て」と同じく主語が続きやすい。開けなかったのも走り入ったのも童。

Q7. ▶ 答え：**イ**　「て」で主語継続。沸かしたのも飲ませたのも嫗。飲むのは翁でも、「飲ませ」る主語は嫗。

Q8. ▶ 答え：**ウ**　接続助詞「を」（連体形「過ぐる」に付く）で主語が交替しやすい。通るのは中将、招くのは女房。

Q9. ▶ 答え：**ア**　「に」で主語が交替（姫→中将）し、そのあと「て」で中将のまま続く。立ち止まったのも聞いたのも中将。

Q10. ▶ 答え：**ウ**　「て」は主語継続の合図。語ったのも嘆いたのも翁。「嫗に」は語った相手にすぎない。

Q11. ▶ 答え：**イ**　「ば」で主語が交替しやすい。上げたのは女房、下り立ったのは姫。

Q12. ▶ 答え：**ア**　「は」は主語（話題）の宣言。「中将は」とあるので、立っていたのは中将。まず「は・が・も」を探すのが基本。

Q13. ▶ 答え：**イ**　「に」で主語が交替しやすい。走るのは童、「に」のあとは犬に変わる。

Q14. ▶ 答え：**ウ**　「て」で主語継続。切ったのも作ったのも翁。

Q15. ▶ 答え：**ア**　「で（〜ないで）」は主語が続きやすい。読みかけたのも泣き伏したのも姫。

Q16. ▶ 答え：**ウ**　「ど」で主語が交替しやすい。呼ぶのは嫗、答えないのは呼ばれた姫。

Q17. ▶ 答え：**ア**　「て」で主語継続。馬を引いたのも控えたのも随身。

Q18. ▶ 答え：**イ**　「て」で主語継続。聞きつけたのも歩み寄ったのも中将。琴を弾いている人（姫）と取り違えない。

Q19. ▶ 答え：**ウ**　接続助詞「を」（連体形「立つる」に付く）で主語が交替しやすい。立てるのは女房、やめさせたのは姫。

Q20. ▶ 答え：**イ**　「ば」で主語が交替（童→嫗）し、「て」で嫗のまま続く。出て来たのも問うたのも嫗。

【第2部】敬語の手がかり（Q21〜Q50）

Q21. ▶ 答え：**ア**　「御覧ず」は「見る」の尊敬語。尊敬語が付いた動作の主語は身分の高い人＝帝。

Q22. ▶ 答え：**ウ**　「仕うまつる」は謙譲語。お仕えして演奏する側＝召された中将。帝の動作なら尊敬語が付くはず。

Q23. ▶ 答え：**イ**　「のたまふ」は「言ふ」の尊敬語。主語は身分の高い姫。お仕えする女房側なら「申す」などになる。

Q24. ▶ 答え：**ア**　「奉る（差し上げる）」は謙譲語で、受け手＝帝が高貴。差し上げる主語は大臣で、「給ふ」（尊敬）はその大臣も高貴だと示す（謙譲＋尊敬の二段構え）。

Q25. ▶ 答え：**イ**　「申す」は謙譲語。申し上げる側＝参上した嫗。「て」で「参りて」から主語も続いている。

Q26. ▶ 答え：**ウ**　「せ給ふ」は二重敬語（最高敬語）。その場面で最高位の人＝帝の動作と判断する。大臣・随身には使わない。

Q27. ▶ 答え：**ウ**　「折りけり」に敬語がない。敬語なしの動作の主語は身分の低い人のことが多い＝童。「うけたまはる」（謙譲）も童側の動作。

Q28. ▶ 答え：**イ**　「給ふ」（尊敬）が付くので主語は身分の高い人。「内より」＝御簾の内にいる姫。中将の動作は「参る」（謙譲）で示されている。

Q29. ▶ 答え：**ア**　「奏す」は帝に申し上げる絶対敬語。申し上げる相手が帝、申し上げる主語は参上した中将。「て」の継続も手がかり。

Q30. ▶ 答え：**ア**　「侍り」は丁寧語（おります）。聞き手への礼儀を示すだけで身分の上下は決めないが、ここは答えた話し手自身＝女房が「おります」の主語。

Q31. ▶ 答え：**イ**　「奉り」（謙譲）で受け手＝姫君を高め、「給ふ」（尊敬）で差し上げる主語＝中将も高める。謙譲＋尊敬の形は、身分の高い人がさらに上の人へ動作する場面。

Q32. ▶ 答え：**ウ**　「給ふ」（尊敬）が付くので、主語は敬われる側の尼君。仕える童の動作なら敬語なし（または謙譲語）になる。

Q33. ▶ 答え：**ア**　「思す」は「思ふ」の尊敬語。直前で噂をお聞きになった（聞こし召す＝尊敬）帝が、そのまま思う主体。

Q34. ▶ 答え：**イ**　「参る」は謙譲語で、参上する主語はへりくだる側＝召された女房。お呼びになった中宮が参上するのではない。

Q35. ▶ 答え：**イ**　「大殿籠る」は「寝」の尊敬語。お休みになるのは身分の高い帝。「ば」で主語が交替する流れ（人々→帝）とも合う。

Q36. ▶ 答え：**ア**　「仰す」は「言ふ」の尊敬語。命じる主語は身分の高い大臣。「て」で「召して」から主語も続く。

Q37. ▶ 答え：**ウ**　「聞こゆ」は「言ふ」の謙譲語（申し上げる）。申し上げる主語はお仕えする女房。病んでいる姫は受け手。

Q38. ▶ 答え：**ウ**　「賜はる」は「もらう」の謙譲語（いただく）。いただく主語は低い側＝翁。お与えになる側（帝）と取り違えない。

Q39. ▶ 答え：**ア**　「啓す」は中宮・東宮に申し上げる絶対敬語。申し上げる相手が中宮、申し上げる主語は参上した女房。

Q40. ▶ 答え：**イ**　会話文の中の主語は話し手が基準。「参る」（謙譲）は自分の動作をへりくだる言い方なので、参上するのは話し手の中将自身。

Q41. ▶ 答え：**ウ**　「給ふれ」は下二段の「給ふ」＝謙譲。「給ふる・給ふれ」の形は会話文で話し手（一人称）の思考・知覚に付くので、思う主語は話し手の中将自身。

Q42. ▶ 答え：**イ**　「させ給ふ」は二重敬語＝その場の最高位の人のサイン。お仕えして候ふ大臣たちではなく帝。「〜に」と動作をさせる相手もないので使役ではない。

Q43. ▶ 答え：**ウ**　「賜ふ」で文を受け取ったのは女房。「渡しけり」に敬語がないことも、主語が姫ではなく仕える側の女房だと教えてくれる。

Q44. ▶ 答え：**ア**　「召す」は「呼ぶ」の尊敬語で、お呼びになる主語は身分の高い帝。「て」で「問はせ給ひて」（二重敬語）からの継続でもある。

Q45. ▶ 答え：**イ**　「奉る」は謙譲語（差し上げる）。差し出す主語はへりくだる側の翁。受け手（内裏＝帝）が高貴であることを示す。

Q46. ▶ 答え：**ア**　「御覧ず」は「見る」の尊敬語で主語は高貴な人。「て」で「上げさせ給ひて」（二重敬語）の主語＝中宮がそのまま続く。

Q47. ▶ 答え：**イ**　「候ふ」はお控えする意の謙譲語。お控えする主語は仕える側＝御供の童。主人の中将なら尊敬語が付くはず。

Q48. ▶ 答え：**ア**　「のたまふ」（尊敬）の主語は身分の高い大臣。あとの「申す」（謙譲）の主語が随身、と敬語の向きで言い手が対になっている。

Q49. ▶ 答え：**ウ**　会話文の主語は話し手が基準。「持て参る」（謙譲）は自分の動作をへりくだる形なので、持って参上するのは話し手の女房。

Q50. ▶ 答え：**ウ**　「聞こえ」（謙譲）で受け手＝大臣を高め、「給ふ」（尊敬）で申し上げる主語＝中将も高める。謙譲＋尊敬は、高貴な人がさらに上の人へ動作する形。

【第3部】文脈・常識の手がかり（Q51〜Q80）

Q51. ▶ 答え：**イ**　会話文の中の主語は、その言葉を言っている人が基準。「参り来む（参上して来よう）」は話し手の中将自身の動作。

Q52. ▶ 答え：**ウ**　返り事をするのは文を受け取った人、という動作の常識で判断。受け取ったのは姫。

Q53. ▶ 答え：**ア**　文を「見せられた」人が読む、という流れの常識。読みかけて涙にくれたのは、読み手の翁。

Q54. ▶ 答え：**ア**　「〜と思ふ」の主体は、直前に心を動かされた人。のぞき見て感動したのは中将。

Q55. ▶ 答え：**ウ**　呼ばれた人が参上する、という流れの常識。「参る」（謙譲）も、主語が仕える側の童だと示している。

Q56. ▶ 答え：**ウ**　指示語「かの人」は直前に出た姫を指す。姫は恋われる相手であって、恋い続ける主語は見た側の中将。

Q57. ▶ 答え：**イ**　問われた人が答える、という会話の流れ。問うたのは嫗なので、答えるのは姫。

Q58. ▶ 答え：**ア**　お仕えするのは目下の者、という常識。主人の中将に仕えるのは童。直前の話題の人物が続く流れでもある。

Q59. ▶ 答え：**ウ**　看病して差し上げるのは付き添う人、という常識。直前の話題の動作主（驚き騒いだ嫗）がそのまま続く。臥している姫ではない。

Q60. ▶ 答え：**ア**　「うれし」と思うのは心を動かされた人。願いがかなったのは中将なので、喜ぶ主体も中将。

Q61. ▶ 答え：**イ**　語っている（言う動作の）主語は女房だが、傍線部「泣き給ひしか」は会話の中身。「姫君こそ」と言っているとおり、泣いたのは姫君。話し手と話の中の主語を区別する。

Q62. ▶ 答え：**ウ**　「〜と思ふ」の主体は、直前に心を動かされた人。琴の音を聞いて不思議に思ったのは中将。弾いている人は思われる対象。

Q63. ▶ 答え：**イ**　命じられた人が実行する、という流れの常識。命じたのは大臣、車を寄せたのは召された随身。

Q64. ▶ 答え：**ア**　歌の「返し（返歌）」をするのは詠みかけられた人、という常識。詠みかけたのは中将なので、返したのは姫。

Q65. ▶ 答え：**イ**　「見ゆ」は「見える」の意で、主語は見られる側。見えるのは御簾の内の姫で、見ているのは中将。「見る」と「見ゆ」で主語が逆になる点に注意。

Q66. ▶ 答え：**ア**　退出（まかづ）した人が戻って参上する、という話の流れ。同じ女房の動きが続いている。

Q67. ▶ 答え：**ウ**　傍線部は女房の答えの中身。何がどこにあるかを述べた文で、「おはします」（尊敬）の主語は話題の姫。話し手の女房自身ではない。

Q68. ▶ 答え：**ア**　直前の話題の人物が次の動作の主語になりやすい。寺で勤めをして鐘をつくのは僧、という常識とも合う。

Q69. ▶ 答え：**イ**　御衣をいただいた側が喜んで帰る、という流れの常識。内裏の主である帝が「家に帰る」のは不自然。

Q70. ▶ 答え：**ウ**　「〜と思ふ」の主体は心を動かされた人。返事をもらえず嘆いているのは中将。会話・心内語の「わが」は話し手（思い手）自身を指す。

Q71. ▶ 答え：**イ**　指示語「その童」は直前の童を指す。「て」で折った主語がそのまま続き、差し上げたのも童。

Q72. ▶ 答え：**ア**　会話文の中の主語は話し手が基準。「まかり出づ（退出いたす）」は自分の動作をへりくだる言い方で、退出するのは話し手の女房自身。

Q73. ▶ 答え：**ウ**　「見す」は「見せる」。見せられた人が見る、という流れの常識で、見入ったのは姫。

Q74. ▶ 答え：**イ**　訪ねられた家のあるじが客を喜んで迎え入れる、という常識。門を開けるのは内側にいる翁。訪ねて来た中将ではない。

Q75. ▶ 答え：**ウ**　看病する人が湯を勧める、という常識。付き添っているのは姫で、「ず」のあとも同じ姫の動作が続く。病人の翁ではない。

Q76. ▶ 答え：**イ**　心の中の言葉（心内語）の主体は、直前の話題の人物＝独りでいる女房。姫君は思いやられる相手。

Q77. ▶ 答え：**ウ**　「と思ふ」の主体は心を動かされた人。濡れて立つ中将のことを「聞いて」気の毒に思ったのだから、主語は門の内にいる姫。

Q78. ▶ 答え：**イ**　「誰そ（誰だ）」と尋ねるのは、内側にいる家のあるじ＝翁。叩いた本人が「誰だ」と問うのは不自然、という常識で判断。

Q79. ▶ 答え：**ウ**　旅立つことになった人が暇乞いをして出発する、という話の流れ。「して」で主語も続く。見送る姫ではない。

Q80. ▶ 答え：**ア**　「とて（〜と言って）」の前後では話し手の動作が続きやすい。言ったのも格子を下ろしたのも嫗。

【第4部】入試型の総合（Q81〜Q100）

Q81. ▶ 答え：**ア**　「ど」で主語が交替しやすい（帝→姫）うえ、「参る」（謙譲）の主語は召された側。手がかりが二つ重なって姫と決まる。

Q82. ▶ 答え：**ウ**　文を開けて見る（見ない）のは受け取った人、という常識に加え、「給ふ」（尊敬）が付くので随身ではなく高貴な姫。

Q83. ▶ 答え：**イ**　「奏す」は帝に申し上げる絶対敬語なので、聞き手は帝。さらに「せ給ふ」（二重敬語）は最高位の人のサイン。しみじみ感心なさったのは帝。

Q84. ▶ 答え：**ウ**　弾いているのは「給ふ」（尊敬）の付く内なる姫。「ば」のあとで主語が交替し、「聞き入る」に敬語がないことからも、立ち止まって聞いたのは通りかかった中将。

Q85. ▶ 答え：**ア**　会話の中身でも敬語は手がかりになる。「おはす」（尊敬）の主語は高貴な客＝「中将殿こそ」と言われている中将。話し手の女房自身なら謙譲語を使うはず。

Q86. ▶ 答え：**ウ**　お迎えする家のあるじがかしこまって御前に出る、という常識に加え、「参り候ふ」（謙譲）は仕える側の動作。帝は迎えられる側。

Q87. ▶ 答え：**ア**　「て」で主語継続。不思議に思ったのも問うたのも嫗。会話の中の「嘆き給ふ」（尊敬）の主語は姫で、問う側と問われる側を区別する。

Q88. ▶ 答え：**ア**　中将は帰ってしまったので、あとに残って名残を惜しむのは姫（文脈）。「思す」（尊敬）も、主語が高貴な姫であることと合う。

Q89. ▶ 答え：**イ**　「させ給ふ」（二重敬語）は最高位の人のサイン。献上された菊をおほめになったのは帝。大臣の動作は「奉り給ふ」（謙譲＋尊敬）と区別されている。

Q90. ▶ 答え：**ウ**　「給へ」は下二段の「給ふ」＝謙譲で、会話の話し手自身の動作に付く形。夢を見たのは話し手の姫。地の文の「のたまふ」（尊敬）も話し手が姫だと示す。

Q91. ▶ 答え：**イ**　「ば」で主語が交替しやすく（女房→別人）、「させ給ふ」（二重敬語）は最高位の人のサイン。お出ましになったのは中宮。

Q92. ▶ 答え：**ウ**　接続助詞「を」（連体形「給へる」に付く）で主語が交替しやすく、「奉る」（謙譲）の主語はへりくだる側。拾って差し上げたのは御簾の外の中将。

Q93. ▶ 答え：**ア**　「仰せらる」は「言ふ」の最高級の尊敬表現。御前に候ふ大臣・中将ではなく、お尋ねになったのは帝。あとの「奏す」（帝に申し上げる）とも向きが合う。

Q94. ▶ 答え：**イ**　答えの会話は「奏す」（帝に申し上げる）と結ばれるので、話し手は召された中将。「承る」（謙譲）も臣下側の動作で、聞いていないのは中将。

Q95. ▶ 答え：**ウ**　「ど」で主語が交替しやすい（嫗→別人）うえ、「給ふ」（尊敬）が付くので、聞き入れないのは高貴な姫。嫗の動作は「きこゆ」（謙譲）で示されている。

Q96. ▶ 答え：**ア**　会話の中の主語は話し手が基準。「啓す」は中宮・東宮に申し上げる絶対敬語なので、申し上げる相手が中宮で、申し上げる主語は話し手の女房。

Q97. ▶ 答え：**ウ**　「奏す」の相手＝帝が、「聞こし召す」（尊敬）でお聞きになり、「せ給ふ」（二重敬語）で驚きなさる。絶対敬語と二重敬語の重ね技で帝と決まる。

Q98. ▶ 答え：**イ**　「奏す」の相手は帝。その帝が「御覧じ」（尊敬）、「て」で主語が続いたまま「のたまはす」（「のたまふ」よりさらに高い尊敬語）。よって仰せになったのは帝。

Q99. ▶ 答え：**ウ**　「ば」で主語が交替しやすい（姫→別人）。「賜ふ」で文を受け取ったのは女房で、「参る」（謙譲）も仕える側の動作。届けたのは女房。

Q100. ▶ 答え：**イ**　中将は出立してしまったので、「御簾のうち」に残って泣くのは姫（場所と文脈）。「給ふ」（尊敬）も随身でなく姫と合う。残された人が泣く、という常識も重なる。